

01

January
2024

[月刊] キリスト教書評誌

本の

HON-NO-HIROBA

ひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2024年1月1日発行(毎月一回1日発行)第793号

出会い・本・人

キリスト教史は一国史を越えられるのか？

吉田 亮

特集シリーズこの三冊！

日本でキリスト教の黄金時代を本気で始めるために
この三冊！ 清涼院流水

本・批評と紹介

B・W・アンダーソン 著／高柳富夫 訳 旧約聖書 月本昭男

コンラート・シュミット 著／小友 聡 監訳／日高貴士 耶訳

旧約聖書神学 山我哲雄

近藤勝彦 著 わたしの神学六十年 小泉 健

ブレナン・マニング 著／日本聖書協会 訳

ひと時の黙想 心の貧しい人とは 英隆一朗

晴佐久昌英 著 贈りもの 土肥研一

渡辺正男、小島誠志、島しづ子、川崎正明、上林順一郎 共著

夕暮れに、なお光あり。 三吉信彦

金子晴男 著 キリスト教思想史の諸時代 別巻1 出村みや子

大貫 隆著

原始キリスト教の「贖罪信仰」の起源と変容 田中健三

H・ナウエン、W・ガフニー 著／原みち子 訳／木原活信 解説

老い 橋谷英徳

土橋茂樹 著 教父哲学で読み解くキリスト教 阿部善彦

不安という相棒

四つのタイプとどう付き合えばよいか

フリッツ・リーマン著／赤坂桃子訳



私たちの人生の一部である不安に上手に対処し、良い人生を送るためにはどうすればよいのか。本書は精神分析的な視点から不安を四つのタイプ・対応するパーソナリティに分類し、より良き対処法を豊富な例証と共に記述。1961年の初版以来今日まで百万万部近くを売り上げた戦後ドイツのベストセラー。

◆四六判・定価2970円

反響！

復刊しました！ いのちの水

【作】T.ハーバー 【絵】望月麻生
【訳】中村吉基

もともと誰もが飲めた湧き水なのに、いつの間にか壮麗な壁や厳格な規則ができ、ついに閉鎖的な礼拝堂になってしまった悲しい泉の物語。

◆B6判・定価1650円

イザヤ書註解Ⅰ 1—10章

10月25日

ジャン・カルヴァン著／堀江知己訳 1551年に出版されたカルヴァン初の旧約註解。ヘブライ語の深い知識に基づき、いかに真剣に預言書に取り組んだかが如実に伝わる。邦訳全5巻。

◆A5判・定価6820円



内村鑑三 闘いの軌跡

9月25日

関口安義著 内村の激動の生涯を実証的な調査に徹して描き、新たな内村像を提示した評伝大作。著者は芥川龍之介研究から出発し、芥川人脈の多くの知識人の評伝をももてきた。本書は『評伝矢内原忠雄』に次ぐライフワークであり、遺作となった。

◆A5判・定価7975円

▼同じ著者による既刊

評伝 矢内原忠雄

生涯をつぶさに追跡した
矢内原伝の決定版

◆A5判・定価8800円



〈よきサマリア人〉
1984年の作品

発売中 定価660円

渡辺禎雄 版画家カレンダー

2024年版

牧会書簡

10月13日

現代新約注解全書

辻 学 著 (つじ・まなぶ氏は広島大学教授)

「第一テモテ」「第二テモテ」「テトス」の3書簡を徹底的に読み解いた世界最高水準の注解書。『福音と世界』連載に加筆し堂々完成。邦語で類書のないきわめて貴重な労作。

◆A5判・定価9900円



キリスト教史は一国史を越えられるのか？

吉田 亮

キリスト教史は国境によって分断化されたもの、という認識があたりまえである。では移民キリスト教史の場合のように、特定国家の領土外に移動し、滞在、永住または転移民するキリスト者の場合は、どのように記述すればいいのか。出身国及びホスト国家両方にまたがる活動を行う人々を主体とするキリスト教史は、一国史観に立つならば、二つに切り裂かれたものとならざるを得ないのか。このような疑問を懐かせるきっかけとなったのが、杉井六郎『遊行する牧者―辻密太郎の生涯』（教文館、1985）であった。

辻は、1880～90年代に日本で、20世紀前半期にハワイとアメリカ本土で組合教会牧師として同胞への伝道に献身した人物である。日本キリスト教史、ハワイ及びアメリカ本土の日系人キリスト教史においても、個別教会史まで見ないと名前を見つけることができない。辻は、欧米の人種主義（集団別に差別化する）的国家形成を真似、アジアを踏み台に一等国化を進めて

いる日本と、それに同調する組合教会の自給自治政策下に周縁化され捨てられていく地方の信徒の立場に立つて組合教会を批判し、最終的に組合教会を脱会する。その後、ハワイやアメリカ本土に移民した信徒達を追って日本人移民教会の牧師となる。辻は、アメリカでも、人種主義的国家形成を担う米国社会からの「同化」と「排除」攻撃下に苦しみ日本人移民信徒の代弁者、擁護者として、地方の日本人移民農業従事者の友であり続けた。米プロテスタントに対して苦言を呈しながら、日米人の新たな関係の有り様を模索し続けた。辻にとってキリスト教は国境によって分断不可能なもの、むしろ両者を繋ぐ役割こそ担うべきものであった。

ナショナリズムが世界を席卷しつつある現在であるからこそ、「越境」・「繋ぐ」視点からのキリスト教史の見直しが必要ではないだろうか。



▼シリーズ この三冊！

日本でキリスト教の黄金時代を本気で始めるために この三冊！

清涼院流水

(せいりょういん・りゅうすい…作家、英訳者)

新しい時代の幕開けに、ようこそ。

あなたがなにげなく読み始めたこの文章は、あなたのクリスチャン人生を大きく変えるきっかけとなるかもしれません。少なくとも筆者は、そうなることを本気で目ざして書きました。これはただの書評でもコラムでも雑談でも冗談でもなく、日本のキリスト教会の未来を見据えた渾身の提言です。

人類史を通じて常に世界最大の宗教であり続けてきたキリスト教が、日本ではいっそうに信徒数が増えない不思議

議な現象については、これまで多くの

日本人クリスチャン著述家や研究者が真剣に考察し、その理由らしき仮説がいくつも唱えられてきました。さまざまな議論がありますが、「ノン・クリスチャンがキリスト教への具体的な疑問を述べた際、クリスチャンがうまく答えられないケースが多い」点は大きな理由のひとつとして指摘できます。

ノン・クリスチャンがキリスト教への疑問を述べるのは、厄介なことでは決してなく、大きなチャンスです。思

わず質問するのは、彼らがキリスト教に関心を持っている証拠だからです。しかし、そこで納得できる説明ができなければ、なにかの偶然でせつかく芽生えた貴重な関心の種が「やはり本物の宗教など存在しないのだな」という失望とともに消え去ってしまいます。

クリスチャンの回答能力の欠如が、キリスト教を信じる可能性のある人を遠ざけてしまうことになるのです。そうした事態は、できれば回避したいものですが、そのために特殊な才能も訓練も必要ありません。ただ、「答え方」を知っていれば良いだけの話です。

本稿でご紹介する三冊の本は、筆者の知る限り、ノン・クリスチャンから質問を受けた際に、クリスチャンがキリスト教を弁護する上でリアルに役立つ最強の三冊であり、それは、日本でキリスト教の黄金時代を始めるにあたり、欠かせない三冊でもあります。

まず一冊目は、アメリカ人牧師ライス・ブルークスによる『神は死んだのか 9つの証拠から無神論に挑む』(中嶋典子・吉朝加奈共訳、いのちのことば社フォレストブックス)です。

著者ブルークスは、無神論者やダーウィンの不完全な進化論を盲信する人たちがキリスト教を攻撃する思いつくりのパターンを例示し、どうしてそれが見当はずれの批判なのかを論理的にわかりやすく解説しています。

たとえば、「ヒトはサルから進化したのだから、神が人間を創造したわけではない」という批判については、進化論で科学的に証明されているのは同じ種族間での段階的な小進化であり、サルがヒトになるように種が変わるレベルの大進化は未だ証明されていない事実も詳細に説明されています。

進化論ひとつをとっても、決して小さな話ではありません。「サルがヒト

になったのなら、キリスト教は嘘ですよね」とノン・クリスチャンに言われて、なにも反論できなければ、クリス

チャンが増えるはずがないのです。ほかに、無神論者がキリスト教について、ありとあらゆるアゲ足取りをする事例を本書は隠さずに紹介し、そのすべてを気持ち良いくらい明快に論破し続けます。それらは決して詭弁ではなく、すべて事実に基づいた上での主張なので参考になります。

なお、本書は同じタイトルで映画化されており、映画版では無神論者の教授とクリスチャンの大学生の対決が、魅力的な物語として描かれています。

二冊目は、イギリス人作家C・S・ルイスの名作『キリスト教の精髓』(柳生直行訳、新教出版社)です。本書は『ナルニア国物語』の作者として知られるルイスが、ラジオ放送で語ったキリスト教についての伝説の講義を

書籍化したものです。ラジオの語りなので非常に親しげでわかりやすいですし、お話の展開が澁みないのは、さすが稀代の語り部だと唸られます。

著者ルイスは本書で、キリスト教のあらゆる教派の違いを超えて、なぜキリスト教が正しいとクリスチャンが信じられるのかという理由を、これ以上ないくらいわかりやすい語りくちで解説してくれています。概して、クリスチャンの大多数は、論理的ではなく感覚的にキリスト教を理解し信頼しています。どうして自分たちがキリスト教を信じられるのか、うまく言語化できないケースが多いのです。それこそ、ノン・クリスチャンから鋭い質問をされた時にクリスチャンが困惑してしまう理由です。ところが、ルイスは、その「なんとなく信じられた」という漠然とした感覚を本書で見事に言語化しています。ここで語られているルイス

の語りを日本人クリスチャンの多くがマスターして周囲に披露できるようになったら、キリスト教に目ざめる日本人がたちまち激増するでしょう。そう断言できるほどの傑作です。

三冊目は十七世紀のフランスが生んだ天才ブレイズ・パスカルが書き遺した原稿をまとめた『パンセ』(前田陽一・由木康訳、中公文庫)です。

パスカルは、数学者、物理学者、哲学者、発明家として名を成した、人類史に特筆される不世出の異能のひとりです。その人類最高レベルの頭脳が、「どうしてキリスト教を唯一の真理として信仰できるのか」という根拠を延々と書いているのが、本書です。

人類屈指と広く認められた頭脳がキリスト教を弁護してくれるのですから、まさに最強の護教家です。唯一の難点は、パスカルの頭が良すぎるあまり、論理展開がかなり難解である、という

点です。しかも、それは膨大なテキストになりますので、よほど根気のある読者でなければ、通読するのは難しいかもしれません。筆者自身、パスカルの主張をすべて理解できているとはとても思えませんが、これほど伶俐に研ぎ澄まされた頭脳がキリスト教こそが唯一の真理だと確信し、全肯定しているという事実を知るだけでも、本書は一読の価値があるでしょう。

キリスト教を信じるのは非論理的な人間だけだ、という批判には、パスカルの『パンセ』を突きつけるだけで、黙らせることができます。なにしろパスカルより論理的な人間を現代日本で見つけ出すのは困難ですし、本書の切れ味鋭い論理の展開は、おそらく誰ひとり反論は不可能からです。本書を批判しようにも、「でも、あれは古典ですよ」という論点のズレた苦しい言い逃れしかできないでしょう。

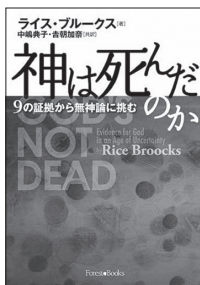
筆者は、英語圏の神学者が「パスカルの『パンセ』ほど、ノン・クリスチャンをキリスト教に改宗させた本はない」と書いた文章を読んだことがあり、その話に納得できます。しかしながら、欧米人と違ってキリスト教の基礎知識がない日本人のノン・クリスチャンにとっては、聖書の基本的な話だけでも難解に感じられてしまう恐れがあります。また、読者が核心部分に至る前に挫折しそうな重厚さは、本書の悩ましい弱点と言えるかもしれません。

本稿では、ノン・クリスチャンから疑問をぶつけられた時にキリスト教を弁護するためにリアルに役立つ最強の三冊を見てきました。日本人クリスチャンの多くが、これらの本で紹介されている論理を身につけ、ノン・クリスチャンとの対話で発揮できれば、それによってクリスチャンになる可能性のある日本人は、たくさんいるはずで

す。これまで日本においてクリスチャンがいっそうに増えなかったのは、日本の特殊な土地柄に合っていなかったわけではなく、単に布教の方法が根本的に絶望的に間違っていただけです。ごく近い将来、日本人クリスチャンの意識改革で日本において過去最大のキリスト教の黄金時代が始まる未来を

筆者個人的には確信しており、一ミリも疑いません。ただ、それは個人の力では不可能なので、同じような志を持つ人たちが大同団結することが不可欠です。日本のキリスト教会の明るい未来をつくるために、微力ながら今後も全身全霊で取り組む所存です。この拙い文章を読んでくださっている

るクリスチャンの皆さん、日本におけるキリスト教の黄金時代をつくるために、ぜひ教派を超えて共闘させてください。同じ志を持つ人たちが手を取り合って立ち上がる時に、この信仰不毛の地・日本におけるキリスト教の黄金時代は必ず成就します。今ここから、一緒に新しい時代を始めましょう。



『神は死んだのか ——9つの証拠から無神論に挑む』

ライス・ブルークス：著
中嶋典子、吉朝加奈：訳
いのちのことば社
2015年
四六判 392頁
2,200円



『キリスト教の精髓』

C.S. ルイス：著
柳生直行：訳
新教出版社
年刊
B6判 358頁
2,860円

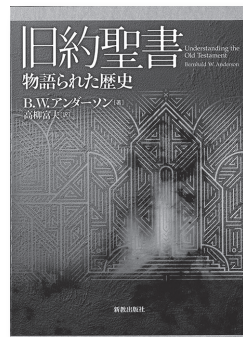


『パンセ』

パスカル：著
前田陽一、由木 康：訳
中央公論新社
2018年刊
文庫判 744頁
1,540円

旧約の解説とイスラエル神学 思想史を兼ねる名著

〔評者〕 月本昭男



旧約聖書
物語られた歴史
B・W・アンダーソン著
高柳富夫訳



学術的であつてしかも読みやすい旧約聖書の解説書は多くはない。一九五七年の初版以来、重要な研究成果を加味した改訂がほどこされて、版を重ねている本書は、その両面を備えている。邦訳は改訂第五版（二〇〇七年）に基づく。著者はプリンストン大学、ボストン大学などの神学部で教鞭をとられた米国を代表する旧約聖書学者の一人（二〇〇七年に逝去）。

解説書といつても、本書は旧約各書を順次解説するわけではない。独自の神信仰を育んだイスラエルの民が時代ごとにいかなる課題と取り組み、それをどのように後代に伝えようとしたのか。そうした観点から、この民の歴史に沿って旧約各書の思想と信仰が明らかにされてゆく。その歴史は大きく、民族形成の時代（第一部）、王国時代（第二部）、第二神殿時代（第三部）に区分され、各時代には

主題別にそれぞれ六つの章が設けられる。そして、近年の歴史学、古代オリエント学、考古学、文献学の研究成果をふまえつつ、各章に著者ならではの考え抜かれた聖書解釈が表明される。

たとえば、「モーセ律法の再発見」と題する一章では、ヨシヤ時代の「申命記改革」に焦点があてられ、改革の神学的基盤とされた申命記が「モーセの説教」として提示される。そこでは、出エジプト伝承にあらわされたイスラエルの民に対する「神の愛」がこの民に「神への愛」を要請し、それが慈愛あふれる行動へと彼らを促す。それによって虐待られた者たち、社会的に弱い立場におかれた者たちの保護を旨とする「人道主義」が基礎づけられたのである。だが、そのような「愛と連帯の精神」を律法化し、戒律の遵守と違背を神の祝福と呪詛に直結させることによって

「歴史における神の働きを単純化してしまった」と、申命記神学の欠陥を指摘する。そのために、「もし人が神の法に従つても苦難や困難に見舞われるとしたならば、神とは

いかにして義でありうるか」という大きな疑問が残されたが、この疑問に正面から取り組んだ預言者がヨシヤ王の死の直後に登場したハバククであった（四六四―七六頁）。

各章がこのように印象深く綴られてゆく本書は、旧約聖書の解説でありながら、イスラエル神学思想史といったおもむきをもつ。そこに流れる通奏低音は「契約」思想であり、神と「契約」によって結ばれた民イスラエルの自己理解である。古代西アジアには、イスラエルの民が登場するはるか以前から契約観念が発達していたが、神と民の関係を契約関係にとらえたのはイスラエルのほかになかったの

である。

それにしても、本文だけで八〇〇頁に及ぼうとする本書は簡単には読みとおせない。評者は、聖書に関心をもつ方々が旧約聖書の各書を学ぶ際に、その時代と思想的位置づけを確認すべく、本書を手もとにおかれることをお勧めする。本書には、時代ごとの詳しい年表は一〇点、地図は一四点におよび、旧約聖書理解に欠かせない重要概念が各章に二つないし三つ、最近の旧約聖書研究をふまえながら、わかりやすく説明されている。訳文はごく自然でなめらか、翻訳書であることを感じさせない。

（つきもと・あきお 立教大学・上智大学名誉教授、古代オリエント博物館館長）

（A5判・八八六頁・定価七三七〇円・新教出版社）

神学ダイジェスト135号

急速な変化を遂げる現代社会。その中にある、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2023年12月発行
A5版112頁
定価640円（税込）

特集 現代の諸問題に教会はどう応えるか
諸問題に取り組むにあたって大切にしたいこと
夢見る教皇―より良い政治を夢見る信徒を― D・アルバートソン J・P・バテュ
悪の問題を試される全能の父 J・B・メツツ
神とこの世の悪―忘れてはならない神義論― H・P・コスタ
人新世の罪と救い―気候、コロナ、ジェンダー― S・G・コチユタラ
多元主義的状況におけるカトリック倫理 M・サール
「見る・判断・実行」法―アジアからの提言― D・F・ピラリオ
現在と永遠―コヘレトの言葉における時間― N・ローフィンク
●連載 典礼参加へと招かれて（二）
●連載 私は思ったより大丈夫

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

21世紀のスタンダードな 研究成果を一望できる一冊

〈評者〉**山我哲雄**



旧約聖書神学
コンラート・シュミット 著
小友 聡監訳
日高貴士耶訳



フォン・ラートやツインマリの名著以来久方ぶりに、しかも最新（原著二〇一九年）の旧約聖書神学が日本語で読めるようになった。著者コンラート・シュミットはスイスの出身で一六六五年生まれ。現在チューリヒ大学教授で、同じくスイスを拠点とするローザンヌ大学のトマス・レーマーと並び、国際学界で最も精力的に活動している最先端の旧約学者の一人で、二〇一九年から二二年まで国際旧約学会（IOSOT）の会長を務めている。五書や預言書を中心に幅広い研究分野を持ち、旧約学でも専門の細分化が進むなか、旧約聖書全体を俯瞰する総合的・包括的でスケールの大きい学風を特色とする。すでに『旧約聖書文学史入門』が拙訳で紹介されている。

本書は全九章からなり、第一章の序論に続き、第二章と第三章では「旧約聖書神学」を構成する「神学」と「旧約

聖書」とは何かがそれぞれ概念規定される。第四章ではイスラエル宗教史、組織神学等の隣接分野との関係と本書の方法が示され、第五章では宗教、教派により旧約聖書の形態や区分の仕方、文書の配列に差異があり、そこにそれぞれ異なる「神学」が示されていることが指摘される。本書の中心をなすのは第六章から第八章までで、第六章ではユダヤ教正典の区分に従い、「トーラー（律法）」、「ネビイム（預言者）」、「ケトウビム（諸書）」それぞれにいはなる「諸」神学」が展開されているかが示される。第七章は「文学史における神学史の基本路線」と題し、歴史に沿って神学史がたどられ、特に北王国イスラエルの滅亡（前七三二年）、前七〇一年のエルサレムの危機回避、アッシリアの支配、ユダ王国の滅亡（前五八七年）、ペルシアの支配とその没落、マカバイ危機といった各時代の歴史的

状況がそれぞれの時代の「神学」にどのような影響を与えたかが解明される。第八章は「旧約聖書神学の諸テーマ」と題し、神認識（神観）、創造、歴史への神の介入、契約と（族長たちへの）約束、法と律法、神殿と祭儀、国家と民族、王政（メシア思想を含む）、人間観といった重要な神学的「テーマ」が論じられる。最後の第九章は「ヘブライ語聖書あるいは旧約聖書に関するユダヤ教神学あるいはキリスト教神学」である。

本書全体を通じて著者が強調するのは、旧約における神学思想の「多声性」と、テキスト間の連関性（インターテクスチュアリティ）である。すなわち著者によれば、旧約聖書の中には多くの異なる神学的な立場が併存しているのであり、多くのテキストは相互に引用や模倣、仄めかしや

反転、倒立、発展的加筆（フォルトシュライブUNK）などを通じて意図的に連関しあっており、賛同や強化（エスカレーション）、修正や改訂、批判や反論などの形で反応しあっているのである。

訳者の日高氏は現在シュミットのもとで研鑽を積んでおられ、「師匠」の著作の紹介者として最適任であろう。六〇〇ページ近い大著を訳された労を多とするが、分かりやすい日本語表現という点では多少より工夫を要すると思われる部分もある。また、三七二頁では「地」を表すヘブライ語（エレツ）の綴りが（三箇所すべて）間違っている。

（やまが・てつお 日本旧約学会前会長
A5判・六〇八頁・定価八一四〇円・教文館）

金子晴勇 隠れたアンテナ効果とは？

「良心」の天路歷程



天上への道は良心のそれである。M・ルター「良心」は、単に道徳意識の源泉であるにとどまらず、人間の生存と存在の根源「霊性」に深く根を下しているのではないか？ 古今東西の宗教、哲学、文学における著者ならではの縦横無尽なファイルドワークの集積によって新たな「良心論」が誕生！

●四六判上製・二九六頁・一九八〇円

大頭眞一 焚き火を囲んで聴く神の物語・説教篇全8巻完結

好評発売中！

- ① アブラハムと神さまと星空と【創世記・上 在庫僅少】
- ② 天からのほしご【創世記・下 在庫僅少】
- ③ 栄光への脱出「出エジプト記」【出エジプト記 在庫僅少】
- ④ 聖なる神の聖なる民「レビ記」【レビ記 在庫僅少】
- ⑤ 何度でも何度でも何度でも愛【民数記 在庫僅少】
- ⑥ えらべ、いのちを【申命記・上 在庫僅少】
- ⑦ 神さまの宝もの【申命記・中 在庫僅少】
- ⑧ いのち果てるとも【申命記・下 最新刊】

新書判・平均二三四頁
各巻定価二二〇円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

神学的探究の軌跡を辿る

〈評者〉 小泉 健



わたしの神学六十年
近藤勝彦著



東京神学大学では、定年退職する教員が最後の年に「最終講義」を行います。最終講義には大きく分けて二種類あるようです。一つは、神学者としてどのように歩んできたか、どのような課題に取り組んできたかを整理して総括するもの。もう一つは、長年にわたって神学研究を続け、展開や深化を経てきて、最終的に到達した地点を示すものです。どちらも興味深いものです。

近藤勝彦先生がなさった最終講義の題は「十字架と神の国」と言います。これは、先に挙げたどちらのタイプにも当てはまりません。この講義は、後に『贖罪論とその周辺』（教文館）という書物の一章となりました。つまり近藤先生は、いつでももともと大きな、そしてもつと意義深い著作を構想し、そのために必要な一つ一つの章を書くようにして、論文を書き、講演をしておられたということです。

それは生産的であるための知恵でもありません。それよりも、神に託された自分の使命を片時も見失わずにいて、何をするにしてもその使命を果たすこととの結びつきにおいていたということだと思います。

そんなわけで、（最終講義「十字架と神の国」は近藤先生の福音理解の中核が示されているたいへん充実した講義であったのですが）近藤先生の神学的な自伝のようなお話をうかがうことはできなかったのです。近藤先生がどのような問題意識をもって学び、どのようにして神学研究の方向を定め、どのような歩みをたどって研鑽を深めてきたのか、ぜひうかがいたいところです。その願いをかなえてくれるのが、本書の前半三分の一を占めている「わたしの神学六十年」です。

神学的自伝と呼ぶべき文章は、いろいろな神学者が遺し

ています。今思い起こすのは、桑田秀延「神学とともに五十年」（『桑田秀延全集 第五巻』キリスト新聞社）です。これは「私（桑田）の角度から書いた自伝風なよみもの」でありながら、実は神学論であり、また神学校論になっているものでした。近藤先生の場合もそれと似ています。まったく個人的な歩みが語られているようでいて、実は現代の日本で神学的な主体を形成し、神学的な研鑽を続けていくための神学徒論なのです（「神学徒」は神学に取り組む牧師と信徒を含みます）。まるで近藤先生が隣りを歩いで、励ましたり、道を指し示したりしてくださるようです。本書の残り三分の二には、七つの講演・論文が収められています。いずれも、近藤先生の主著であり、上下合わせて二千三百ページに及ぶ大著『キリスト教教義学』を読む

ための手引きをなすものです。およそ学術書を読む時には、その書物の特色は何か、独自の主張や新たな貢献は何かをつかむことが大切です。しかしそれができるためにはその分野についての正確で幅広い知識が必要で、わたしたちには難しいことです。本書に収められた諸講演において、近藤先生は『キリスト教教義学』から学ぶべき要点を実にわかりやすく解説してくださいます。それは、わたしたちが教義学を捉える上で、よく考え、わきまえなければならぬ事柄でもありません。ここでも近藤先生はわたしたちの手を引くようにして、一緒に歩き続けてくださいます。

（こいずみ・けん＝東京神学大学教授
（四六判・二二〇頁・定価一九八〇円・教文館）

ヨベルの新刊案内

ヒャッホウ！ 紫園香／菅野万利子著
おばあさんだって冒険したい！



四六判・八〇頁・二一〇〇円
間に輝く星のように、天の輝きを放つアンサンブル！ 日本を代表するフルティストとして国際的活躍を続ける紫園香とクリスチャンピアニストとして国内外で評価されている菅野万利子。豊かなキャリアをささげ尽くすため『Duo Stella』を結成！ 推薦の言葉：岩本遠徳氏

李信建 こどもの神学
朴昌洙訳 神をこどもとして考えられないか

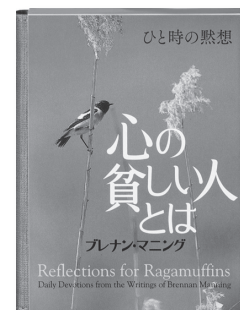


四六判・三三八頁・一九八〇円
神が厳父ではなく、こどもだったなら、キリスト教もまったく違ったものになる！ 子どもたち、とりわけ、暴力や虐待にさらされてきた救え切れないほどのこどもたちにとって、神とは一体何ものなのか？ 現代韓国社会の最前線に立ち尽くしての根源的な問いの果てに一人の神学者が辿り着いた、神こそ、こどもである」という思想、その斬新なる全貌を初邦訳。

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

心貧しい人に語りかける 真実のメッセージ

〔評者〕 英隆 一朗



ひと時の黙想
心貧しい人とは
ブレナン・マニング著
日本聖書協会訳



人の中には、強い人と弱い人の二種類の人がいる。強い人とは、信仰が深く、隣人愛を実践していて、さらに、人格的に立派で、人びとの模範になるような生き方をしていく人だ。そういう人は言動一致しているので、語る言葉に説得力がある。それに対して、弱い人びとも教会の中にたくさんおられる。内面に葛藤をかかえ、実生活がうまくいかず、挫折と失敗の連続。それにもかかわらず、神に頼って、信仰を生きようとしている人だ。不思議なことに、言動の不一致にもかかわらず、弱い人の語る正直な言葉は胸に突き刺さるものがある。

この本の著者、ブレナン・マニングはまさに弱い人の典型である。彼の本の邦訳は初めてだが、アメリカ合衆国では、とても有名な霊的著作家の一人である。彼はカトリックのフランシスコ修道会に入会して、修道者となり司祭と

なった。ところが、アルコール依存症を患っており、生涯苦しんでいた。また、カトリック司祭を辞め、一人の女性と結婚する。しかしながら、離婚してしまう。カトリック教会から見ても、還俗と離婚は落伍者の烙印が押されていることだ。アルコールの過度の摂取が死因の一つと見られている。彼は心底、弱い人であり、それを包み隠さず語っていた。この本のタイトルどおり心の貧しい人 (ragamuffin) であった。だからこそ、彼のメッセージは弱い人びとの心の琴線に触れ、共感と励ましを呼び起こすのだ。

今回の翻訳は、彼の諸著作の中から、三六六日の毎日の黙想用にまとめたものだ。前後に特に脈絡はないが、キリスト教の季節感を感じられる配分になっている（十二月はクリスマス、三月はレント、四月はイースターという風）。その日の分を読んでもよいし、自分に合いそうなど

ころを適当に読み、みことばを黙想することができる。

彼のテーマをまとめるのは難しいが、あえて概括すると、まず弱い自分を受け入れること、そして、神であるイエス・キリストを受け入れることである。マニングのメッセージは、他者に語られているようで、実は自分に語っているようにも読める。語り続けないうと、自分がつぶされてしまうのだろう。同じテーマを角度を変えて、何回も語ってくれる。いかに弱い自分を受け入れるか、自分をそのままで愛してくれる神を信じられるかである。神を受動的に受け入れるというよりも、苦しみの中でイエス・キリストに対する激しい愛を表明している。イエス・キリストがおられるからこそ、生活が破綻しながら、信仰生活を歩み続けられたのである。

だからこそ、この本は弱い人にこそ読んでもらいたい。生きづらさがかかえている人、自分の価値を認められない人、そして、神を信じ切れない人にこそ、この本を手に取り、自分事として、みことばを黙想してほしい。よき知らせはいつも心貧しき者（アナウイム）に届けられるから。（はなふさ・りゅういちろう）カトリックイエズス会司祭、カトリック六甲教会主任司祭

（A6判変形・四一六頁・定価二二〇〇円・日本聖書協会）

日本聖書協会
God's Word — Life for the World

黙想シリーズ

ひと時の黙想

心貧しい人とは
聖書協会
共同訳



ブレナン・マニング (著・文)
山崎雅郎 (写真)

心貧しい人々は、幸いである
天の国はその人たちのものである

「神と真の友になる人とは、
主の前にある自らの貧しさを
思い知った人のことです。」(本文より)

アルコール依存症を患う自分の弱さや失敗を、隠すことなく語ったことで知られたマニング。本書が初の邦訳です。神の前にある自分の貧しさを知り、ただ主に憐れみを乞う人に注がれる、神の大きく激しい愛を語ります。

1日1ページ、365日の御言葉とメッセージ。

合成皮革装・スリーブケース入り

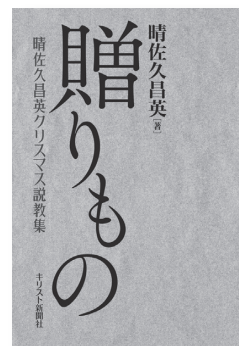
判 型: 天地135×左右103mm
頁 数: 416頁
ISBN: 978-4-8202-9286-9

定価2,200円
(本体2,000円+10%)

お問合せ ☎03(3567)1987 (頒布部)
<https://www.bible.or.jp>

愛のチャレンジへと背中を押す 力強いクリスマス説教集

〔評者〕土肥研一



贈りもの
晴佐久昌英著
晴佐久昌英著



カトリック教会の著名な説教者である晴佐久神父による、待降節から公現日の十本の説教を収める。いずれもこの数年の内に、コロナ下で語られたものである。

読みながらワクワクし、さらに牧師・説教者としての自分を問われる思いがした。ぜひプロテスタント教会に生きる多くの方、特に同労の牧師たちに読んでいただきたい。

この説教の不思議な魅力の源は何だろう。大きく二つの特徴があると思う。一つは、救いをまつすぐに、わかりやすい言葉で宣言する力強さ。例えば、こんな言葉がある。

「待降節の味わいは、『もうすぐ主が来られる、いやもうすでに来ている』っていう喜びにあります。神は私たちを、もうすでに愛しています。その愛の中で、私たちも神を愛します。そんな喜びに満ちた日々を過ごしつつ、クリスマスを迎えます」

「もうすでに来ている」「もうすでに愛されている」「もうすでに救われている」。こういう言い方が、この説教集には繰り返して出てくる。この「もうすでに」のゆるぎなさ

が、本書にみなぎる力強さである。
ここから展開する洗礼理解も印象的だ。「そもそもあなたがこの世界に生まれたときに、神さまは喜んでいます。生みの親ですから。……洗礼はね、神の子が親の愛に目ざめて、『あなたこそ私のまことの親です、あなたの愛を心から信じます』って言うとき、すなわち、神に向かって『ママ』と呼びかける、そういう儀式ですね」。

もうすでに神に愛されている者が、その愛にやっと気づいて、生きる方向を転換する。それを助け、この目ざめの道に同伴するためにこそ、教会は地上に存在し、司祭も牧師も働く。それを改めて教えられ、ワクワクした。

このことと深くつながって、本書の説教のもう一つの特徴が生まれる。それは、説教の中で折々に言及される、苦しむ人々に伴う晴佐久神父の働きである。

例えば、精神科への長期入院を経て、病院を飛び出した青年の話が出てくる。そのままでは路上生活になってしまいうので、勇気を出して近くの教会に飛びこんだ。しかしその教会では「うちでは対応できない。晴佐久神父のところに行く」と言われてしまう。晴佐久神父は、その青年の当面の宿代を工面し、区役所の福祉課に掛け合って住まいを得ることができるようにした。以来共に教会生活を送り、やがて洗礼の希望を申し出てくれたその青年に、晴佐久神父は告げた。「私は初めて会ったときから、ああこれは神さまが出会わせてくださった家族だと思ったし、当

然のこととしてお話しただけです」。

これを美談や自慢話と片付けてしまうなら、なんともつたないことか。「私たちはもうすでに愛されている」。この福音を先に知らされた者として、あなたにも、神が教会

らせてくださる方々があり、その方々にできること、すべきことがある。それを伝える説教集だと思う。
クリスマスの冒険旅行をした占星術の学者たちになぞらえて、晴佐久神父はこう言う。「教会がチャレンジしなくなっちゃったら、もう教会じゃないでしょう。……でも、そんな教会が増えていくんじゃないですか？」神の愛の招きを聴きとりたい。

（どい・けんいち）日本基督教団目白町教会牧師、編集者
（四六判・一四〇頁・定価一三二〇円・キリスト新聞社）

晴佐久神父最新刊！

あなたは
贈りものを
贈られる、
価値のある
存在なのです

贈りもの

晴佐久昌英クリスマス説教集
晴佐久昌英〔著〕

福音を宣言する司祭として、福音家族と呼ぶ、さまざまな人々と共に共食の交わりを広げ、神の国の訪れを語る晴佐久神父。説教者としても衰えを知らない神父がコロナ禍以降に紡いだクリスマスの説教を単行本化。孤独や不安に支配されたこの日本に、いま、届けたい福音のことば。

四六判・並製・138頁、定価1,320円（税込）

キリスト新聞社 since 1946

169-0051 東京都新宿区新小川町9-1
03-5579-2432 support@kirishin.com

ご同輩、夕暮れに向かう 旅装を整えましょう！

《評者》三吉信彦



夕暮れに、なお光あり。
老いの日々を生きるあなたへ
渡辺正男、小島誠志、島しづ子、
川崎正明、上林順一郎共著



本書のタイトル「夕暮れに、なお光あり」は、キリスト新聞 (Kirishin) に掲載されたコラムの名からとられています。そのコラムは高齢者向けに企画され、五人の牧師が交代で執筆し、三年間続きました。今回、それらを眠らせたままにするに忍びないと、各執筆者のエッセイそれぞれ七編ずつを選んで収録、この本が出版されたのです。

サブタイトルに「老いの日々を生きるあなたへ」とあるように、自らも高齢域に達した牧師たちが、仲間に語りかける思いで文章がつづられています。

本の装丁がとてもおしゃれで、野ブドウとワインカラーの枯葉の配置が、人生の夕暮れ、「老いと実り」を美しく描き出しています。夕陽に向かって立つ身に、夕映えの光を浴びる恵みを感じさせます。

本を開くと、各ページの文字が大きく、段落が適度に区

切られていて、文章も簡潔でとても読みやすく感じました。

さて執筆者ですが、渡辺正男、小島誠志、島しづ子、川崎正明、上林順一郎の各牧師です。皆さんそれぞれ著名な方々で、いくつかの教会を牧会されたベテラン牧師です。また著書も多く、教育や福祉、社会問題にも長く関わられた経験豊かな方々で、この五人の選びは絶妙です！このうちお三方は、私と同様にハンセン病療養所との交わりを長く持つておられて、エッセイの中にも触れられています。また、掲載された夕陽の写真は、大島青松園の脇林清さんの作品です。

執筆者の皆さんはその豊かな人生においても、配偶者を亡くされたり、家族に障害者を抱え、あるいは自ら大病を経験されるなど、それぞれ重荷を負ってこられたことがうかがえます。それらを内に秘めつつ、紡ぎ出す言葉の深み

が、読む者の心に響きます。時にユーモアを交えての語り口に心とみえますが、同時に執筆者が老いの現実と真剣に向き合う中で得た結論、あるいは覚悟が生み出したゆとりであると弁えて、心が引き締まる思いでした。

さて、個性豊かな五人の皆さんのエッセイは、どれも心に響くものばかりですが、紙面の関係で私が感動を覚えたエッセイをお一人につき一つずつ紹介します。

渡辺正男牧師は、平易な言葉遣い、短いセンテンスで優しく語りかけて下さいます。「うれしかったこと」心が震えました。

小島誠志牧師は、明るく前向きに「ご同輩！」と呼び掛けて下さいます。「断捨離」以前より蔵書が増えた！元気をいただきました。

島しづ子牧師は、うふざと伝道所の現役の牧師さん。辺野古での活動で船長さんに！「クリスマスプレゼント」深く感動を覚えました。

川崎正明牧師は、文芸や美術に造詣が深く、自然観察眼が豊か。

エッセイにも表れています。「壊れたどんぶり鉢」感動しました。

上林順一郎牧師は、老いの現実を自虐気味に、かつユー

モアをもつて語られます。「しんがりを、のろのろと」私の心にジン！と。

執筆者は皆牧師さんですが、エッセイでは説教じみた話は一切なく、神のみに前に老いてゆくご自分を見つめつつ、最後はやはり短い聖句で締めくくっておられます。皆さんの信仰の深みを感じ、感謝でした。

「執筆者それぞれに、固有の人生があり、個性があります。その紡ぎ出す言葉を、どうぞ、心の耳を澄ます思いで、繙いてみてください。きっと支えになるでしょう」(渡辺正男牧師「はじめに」より)

(みよし・のぶこ) 公益社団法人好善社代表理事、日本基督教団教務教師

四六判・一六六頁・定価一六五〇円・キリスト新聞社

アウグスティヌスの 霊性思想の発展の軌跡

〔評者〕 出村みや子



キリスト教思想史の
諸時代 別巻1
アウグスティヌスの霊性思想
金子晴勇著



今年の六月に『アウグスティヌス著作集』（教文館）が完結したが、本書は当初より翻訳を手掛けられた金子晴勇先生が、アウグスティヌスの神学思想の発展の軌跡をその「霊性」に焦点を当てて歴史的に辿った研究の成果を一般読者にも分かりやすく説明した新書シリーズの別巻である。「霊性」というと彼の神学思想の限られた局面に焦点を当てた研究のように聞こえるかもしれない。しかし「霊」という観念が「聖書のなかで独自のな次元を創り出し」「本来的で本質的な人間存在を言い表す目印」（本書3頁）であり、自らの欲望や罪を深く見つめ続けたアウグスティヌスにとって、「回心はこのような深い内面の「霊性」を舞台にして起こった」（本書54頁）出来事である限り、「霊性」は彼の生涯にわたる人間学的探求の発展の軌跡を辿るための重要なキーワードである。

本書は序論において聖書の「霊」の概念の理解から始まり、続いてアウグスティヌスに先立って初期キリスト教の「霊性思想」を成立・発展させた二人のギリシア教父、オリゲネスとニュッサのグレゴリオスの思想的系譜について論じている。続く本論は一〇章から成り、初期の哲学的著作から後期の主要な著作までを霊性に焦点を当てて網羅的に扱っている上に、近年アウグスティヌス研究の分野で注目されている『説教集』と『書簡集』をも霊性思想の観点から論じている。こうした本書の構成によって読者は、アウグスティヌスの思想的発展を辿りながら、その思索に見られる霊性の深まりに触れることが出来るのである。本書において筆者が注目するのは、従来アウグスティヌスは人間の自由意志を過小評価したとして批判されてきたが、本書の172頁では『神の国』において原罪と自由、

神の恩恵の理解が見られることが指摘されている。「むしろ、意志は罪を犯す喜びから解放されて、罪を犯さないことの喜びへと強く向かう時のほうが、いっそう自由である」というのも、人間が最初に正しく造られた時に与えられた時に与えられていた最初の意志の自由は、罪を犯さないことのできる能力であったが、しかしそれは罪を犯すこともできたのである。だが最後に与えられるそれは、罪を犯すことができないという点で、遥かに力あるものである。これもまた神の賜物によるのであって、人間本性の可能性によるのではない」（XXII.30）。このように述べたアウグスティヌスは「ペラギウスの人間の本性に立脚した自然主義的道德哲学」（39頁）と対決し、恩恵論においてこそ人間の意志の完全に自由な働きを見たのである。

次に注目するのは、アウグスティヌスに先立つギリシア教父の神学的伝統との関係に光を当てている点である。この点はオリゲネス研究の最近の動向とも呼応し、彼がギリシア教父の伝統から何を継承し、その後の中世カトリック神学の形成にいかなる寄与をしたかが、本書の「序論」および「付論」の「アウグスティヌスと古代キリスト教の自然観」に示されている。本書は日本におけるアウグスティヌス研究に新たな方向を示すものとなろう。

（でむら・みやこ＝東北学院大学文学部教授）
（新書判・二五六頁・定価一三二〇円・ヨベル）



汲めど尽きせぬ泉

吉岡繁礼拝説教集

吉岡繁
YOSHIOKA Shigeru



説教者が受けとめた神の言葉を、説教者自身の言葉で語る聖書的・牧会的・実践的説教。教会を形成するのは信徒であるという教会像を示し、育て上げる教育的説教でもある。

A5判・並製
定価2,420 [本体2,200 + 税] 円
ISBN978-4-86325-152-6



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

原始キリスト教の力動的な 伝播を誠実に読み解く

〈評者〉 田中健三



原始キリスト教の
「贖罪信仰」の起源と変容
大貫 隆著



本書は「贖罪信仰」をテーマに、I章からV章までは原始キリスト教においてそれがいつ発生し、どのような変遷を経たかという一次文献に依拠しながら考察したものであり、VI章ではそれまでの章の結論を背景にしつつ、現在の「贖罪信仰」をめぐる議論に参戦している。

原始キリスト教がエルサレムを出発点にしたとしても、すでに早い段階から多様性を持っていたことは、新約聖書が示すところであり、ゲルト・タイセンはキリスト信徒第二世代において大きく四つの系統が見られると述べる(Die Religion der ersten Christen, 2000年)。すなわち「ユダヤ的キリスト教」「共観福音書的キリスト教」「パウロ的キリスト教」「ヨハネ的キリスト教」である。しかもそれらは単に並存していたのみならず、相互に影響し

合っていたのだが、その相互作用について時間軸を含めて明確に立証することは必ずしも容易ではなく、タイセンもそこまで踏み込んだ記述はしていない。

その点で本書は、上記の4系統の相互関係を時間軸も含めて、「贖罪信仰」という観点からではあるが、提示している点が出色である。本書のような構想的論証には精緻な分析が求められ、その点で著者は自らの論証が必ずしも十分とは言えないことを良心的に記している。それにも関わらず、一次文献に依拠しかつ先行研究を活用し、説得力のある刺激的な内容となっている。

本書は復活信仰直後からだいたい2世紀末くらいまでの「贖罪信仰」の過程を提示する。「贖罪信仰」は原始エルサレム教会のペトロが指導者の時代に前面に出て来るのだが、次の指導者である主の兄弟ヤコブ時代になると贖罪論は後

景に退き、モーセ律法遵守の救済論が前面に現れ、その後それは北トランス・ヨルダン地方からシリアへと伝播していった。一方「教理」化した「贖罪信仰」が西方キリスト教会に変容しつつ受容されていった。

I章では、著者の師でもあるフェルディナント・ハーン著 Christologische Hoheitstitel. Ihre Geschichte im frühen Christentum (1966年第3版刊行)の論述を活用しながら、原始エルサレム教会において、「イエスの受難の必然性」への問いがなされ、それに続いて「イエスの受難の自分たちにとっての意味」が探求され、彼らは「人の子」イエスの再臨待望を保持することとなるのだが、そこには未だ「贖罪信仰」はなく、その後ペトロが大いに関わり、新約聖書第一コリント書15章3b-5節に明示されている「贖罪信仰」が形成されるという過程が示されている。

II章では、主の兄弟ヤコブによる律法遵守(但し動物供犠は除く)の救済論が形成されるが、そこには第一コリント15章のような贖罪論は見られない。このペトロとヤコブに救済論の分岐点がある。そしてヤコブのユダヤ主義キリスト教は北トランス・ヨルダンに受容されていく。キリスト教教父の一次文献を取り上げ、そこに見られるユダヤ主義を明示する箇所は、著者ならではの箇所であると言えよ

う。著者はその教父たちの救済論とヤコブのそれとの繋がりを見る(著者による仮説1)。

III章では、ユダヤ戦争によってエルサレムから脱出したキリスト者たちに関連して、その脱出にはマルコ福音書14章58節のイエスの神殿倒壊予言が、根拠付けとなっているという仮説2を提示する。またここでも北トランス・ヨルダンからシリアにかけて展開した2世紀のユダヤ主義キリスト教を一次文献によって示している。

IV章では、エルサレム神殿崩壊から1世紀末までのシリアにおける異なる流れとして、マタイ福音書とヨハネ福音書を取り上げる。さらに洗礼と沐浴儀礼を強化していくユダヤ主義キリスト教の証言としてマンダ教その他のグループを示し、2世紀のユダヤ主義キリスト教の中の多様性を示している。

V章はそれまでのまとめとなっている。

著者は、パウロを代表とする西方キリスト教の贖罪信仰が不在である東方のキリスト教の証言を提示しており、その際に著者がこれまで従事して公にしてきた教父その他の諸文書についての研究業績が十分に活かされている。東方に伝播したキリスト教がヤコブの後継者と自認していたことは、古代シリアの諸教会などの典礼において、ヤコブと

関連付けられた奉献文が残されていることから明らかにあるが、ヤコブと東方教会の歴史的継続性が明確なものであることを本書では示している。著者が述べるように東方キリスト教への視点が西洋や日本では今までなおざりにされており、それは今後さらなる研究発表が期待される分野である。

さてⅥ章では現在日本において、キリスト教内外から「贖罪信仰」をめぐるなされている議論全体を整理しつつ、著者の考えを述べている。

著者は2008年公開の『イエスの時』において、キリスト教の「贖罪信仰」の内容が今や不明瞭になっていることを指摘しているが、その後2011年3月11の東北大地震などを契機として高橋哲哉がくりひろげたキリスト教贖罪論批判とそれをめぐる諸氏の意見などに対して、ここで新たに見解を述べている。著者は高橋の指摘する「犠牲の論理」への批判に共感を示しつつ、関東大震災時に内村鑑三が述べた贖罪論についての高橋の理解を否定している。被災者自身が罪の主体であると内村が語っているという高橋の理解には反対し、むしろ被災者の無罪性を内村は前提としている、と述べる。「キリスト教の贖罪論は、犠牲者

（供犠）の無罪性をほとんど無意識の内に前提してしまう」（本書226頁）という著者の指摘は大変興味深い。著者はⅠ～Ⅵの研究から帰結されるであろう、贖罪論の相対化の土台に立って、現代における贖罪論に関する問題性を自覚し、その上で高橋の論理に批判も加えている。しかし高橋哲哉の問題点は、より根源的なものであるように評者には思われる。

テキスト解釈において、語り手と聞き手の関係性を重視すべきであるという文学理論は、聖書本文についても適用されてきている。評者の考えでは、高橋哲哉らの贖罪論批判にはこの聞き手の存在が欠落した論理のみを扱っていることに問題がある。例えば内村の発言には、関東大震災によつて絶望し、神の存在を疑う具体的〇〇さん、△△さんという他者が確実に存在していることを無視すれば、内村批判は空虚な揚げ足取りに陥るだけである。それは原始エルサレム教会における「贖罪信仰」そしてパウロの「贖罪信仰」についても言える。

柄谷行人は『探求Ⅰ』（講談社、1986年）において、モノローグと対話を区別し、「対話とは『命がけの飛躍』である」と述べ、語り手と聞き手の間における緊張をはらんだ力動的関係性に着目し、言語における他者性の重要性

を指し示した。

原始キリスト教の贖罪論もパウロの贖罪論も内村の言説も、元来はそのような「命がけの飛躍」であつたはずであり、その他者性を無視した普遍的論理などは、花をいけてない花瓶と同じである。贖罪論を論ずる際にこの視点が欠けていることが多く、エマニュエル・レヴィナスの述べる「普遍的構造の彼方に、個人と個人の、人間と人間の関係の重要性を証し立て、匿名的な原則の背後に他の人間の顔を見ること」（『原則と顔』『困難な自由』内田樹訳、国文社、2008年所収、270頁）が不可欠であろう。

著者大貫は、自己完結したモノローグとなつてしまった贖罪論を相手にしており、それ自体は正当に批判をしている。しかしキリスト教贖罪論は元来モノローグではなく対

話であつた点に著者は触れかかっている箇所があるにはあるが、十全とは言えない。その点で今までの一連の諸氏の発言を必ずしも適切に交通整理しているとは評者には思えない。

とは言え、本書は原始キリスト教の力動的な伝播を知ることができものであるとあり、Ⅵ章における日本の諸研究者の紹介（評者の博士論文も含めてくださった）と批判からは、著者の誠実な研究姿勢が感じられる。

（たなか・けんぞう 上智大学神学部講師）
（四六判・二九六頁・定価二二〇〇円・ヨベル）

交読詩編 聖書協会共同訳

「交読詩編 聖書協会共同訳」編集委員会 編



「聖書協会共同訳」でも特に名訳の高い詩編。その全150編を、主日礼拝において司式者と会衆が心を合わせて朗読できるように工夫をこらした書。

●B6判・176頁・定価1,650円

本書の刊行を記念して
日本聖書協会と共同で
特典付きフェアを実施

《キリスト教専門書店限定》
詳細はHPをご覧ください。
右記のQRコード読み取り
でもアクセスできます。



保育者の祈り こどものために、 こどもとともに

望月麻生 監修・著 小林路津子／新井純 著



祈りの習慣のない保育者などの関係者が、公私ともに本音で祈れる62の祈り。保育現場の様々なケースにおける祈りを取めた、大変実用的な一冊。祈りの基本も解説する。

●B6判並製・96頁・定価1,320円

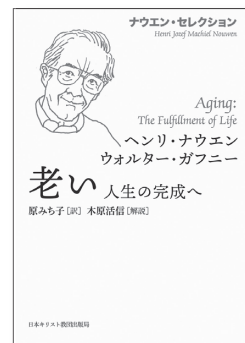
日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail: eigyou@bp.uccj.or.jp 《価格10%税込》

<https://bp-uccj.jp>

年齢を重ねる人への霊的洞察 教会刷新の可能性がここに

〈評者〉橋谷英徳



ナウエン・セレクション
老い
人生の完成へ
H・ナウエン、W・ガフニー著
原みち子訳
木原活信解説



『闇への道 光への道』（こぐま社、一九九一年）の新版である。タイトルは原題通りに『老い——人生の完成へ』と改められた。ナウエンとガフニーの共著である。イメージ豊かな平易なことばで記されている書物でありつつ、ゆつくりと反芻しながら読んでようやくわかってくる深みを持つ書でもある。

老いることの意味が、闇への道と光への道という視点で考察され、さらに世話（ケア）することの意味が明らかにされる。よく見られるハウツーものではなく、老いについて難しく哲学的に論じたものでもない、このような書物は、他に類を見ない。

本書を高齢者の方々に読んでもらいたい。数年前に両親が死去したが、彼らが七十歳代に「老い」に関する本が書棚に幾冊も並んでいた。老いることについて悩みつつ、そ

の道を尋ねていたのであろう。老いを受け入れ、生きることは大変なことである。生産性と効率に呪縛されてしまっている今日の世界は、老いをただ否定的・悲観的にしか捉えようとしめない。そこからの自由と解放、さらには霊的癒しが必要となる。本書はそれを与えてくれる。ここに書かれていることを自らのものとして生き始める時に、景色が一変していくのではないか。

中年期に差し掛かる人たち、若い人たちにも薦めたい。老いとは、年をとること、すべての人に関わる。思春期の危機よりも中年期の危機の方が人間にとってより深刻であると臨床心理の専門家から教わったことがある。死が近づく、その危機がさまざまな現象を生む。それはより深刻な危機となる。高齢に達してはじめて危機が襲うのではない。遥か以前に、多くの人たちがほとんど気づかない間に

危機は訪れている。そこでは自らの老いを受け入れるか否かが決定的に重要なこととなる。本書では「自分の存在の中核」と呼ばれているが、そこで受け入れることが鍵となり、すべてが変わってくる。そこにはあるプロセスが必要となる。そこにケアの道もまた開かれてくる。

家族の介護に労する人たち、各種のソーシャルワーカーや医療現場で働く人たち、信徒たちに本書を手にとってもらいたい。闇の中に光が差し込んでくるようになるかもしれない。「世話をしていくには、自分自身の傷つきやすい自己を、相手を癒やす源として差し出さねばならない。老いゆく人の世話をするとは、それゆえ、なによりまず、あなたが自身が老いゆく自分の自己と深く接触すること、自分の時間を意識すること、自分の人生の軌跡が刻々とつくられているのを感じる」と（本書68ページ）とされる。そこで出会う人々へのケアの道が開かれていく。つまり、ケア（世話）することはただ優しくしたり、訪ねたりすることなのではないし、ハウツーではない。ナウエンの牧会論の心臓部である。

終わりに司祭や牧師たちにこそ、本書を心から薦めたい。筆者の不勉強のせいかもしれないが、神学書を紐解いても、老いることへの深い考察がなされているものを見出しえな

い。率直に言うとなら無自覚にも教会はこのテーマを避け遠ざけてきたのかもしれない。教会では「若さ」にのみ憧れと関心が向けられ、アンチエイジングの共同体となつて、高齢化は「問題」としてしか扱われていないのではない。しかし、そこでは教会は立ち上がることはできない。全く反対に、「老い」について霊的に神学的に考察することが道行き悩む今日の教会に光を与えることになるのかもしれない。このことが教会刷新の突破口となる。本書はすべての私たちの課題に答えを出してはいない。私たちは先を進まねばならない。深く向かい合つてゆきたい。

（はしたに・ひでのり）日本キリスト改革派関教会牧師
（四六判・一四四頁・定価一九八〇円・日本キリスト教団出版局）

神学的議論の 旅の出発点として

〈評者〉**阿部善彦**



**教父哲学で読み解く
キリスト教**
キリスト教の生い立ちをめぐる
3つの問い
土橋茂樹著



最近、教父学にかんする著作の刊行が続いている。そのなかで本書の際立った特徴は教父たちの思想の紹介というよりも、教父たちが文字通りその身を投げうって取り組んだ問題の探究の内がわに読者を引き込むことを目指していることである。教父たちが探究した問題とは、つまるところ、キリスト教とは何か、という問題である。そのような問題理解は、本書のタイトルとサブタイトルに存分に示されている。

しかし、キリスト教とは何か、とはいかなる問題なのか。本書が示すように「キリスト教の生い立ち」から見れば、それは、イエス・キリストはいかなる者であるのかという問いに直結する。それは、教父たち自身が自らの信において受け取っている真理であるイエス・キリストに全身全霊で肉迫し、それを言い表し、他者とともに分かち合おうと

した、その根本的な探究態度に裏づけられた問いである。それゆえに、その探究は、また、キリスト教とは何で無いか、イエス・キリストはいかなる者で無いか、という問いと密接する。それは、自らのうちに抱かれた信が受けとっているものが真実に何であるのかを、人間的理解の限界の自覚に立つて虚心に見つめ直す探究態度にもとづく問いであり、そこに人間自身が生み出す数々の疑似的神理解との厳しい対決が生じる。

こうした教父たちの探究は神と自己をめぐる愛智的探究であり、タイトルにあるように、その「教父哲学」によって著者は読者をキリスト教の探究へと、すなわち、イエス・キリストはいかなる者であるのかという問いとその探究へといざなう。そこで著者はサブタイトルの通り問いを三つ提示する。一、「なぜイエス・キリストは《御言葉》

と呼ばれるのか」(本書第一章)。二、「なぜイエス・キリストは《子》と呼ばれるのか」(本書第二章)。三、「なぜイエス・キリストは《神の像》と呼ばれるのか」(本書第三章)。

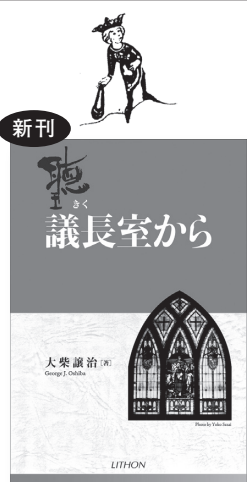
これら三つは本質的な問いであるだけに、そこから高度に思弁的に練り上げられた膨大な神学的議論が積み上げられてきた。実際、数々の概念や論争の経緯を辿っていると肝心のキリスト教やイエス・キリストのことが分からなくなる眩暈に似た経験をした人もいるだろう。でも安心してほしい。著者は立ちすくむ読者の傍らに立つて背中を押して一歩ずつ同行してくれる。出発点となる聖書(この場合特に七十人訳聖書と新約聖書)のなかに、神、救い主、イエスの姿を丁寧にししながら、教父たち(また護教家たち

ち)がそれをどう受けとり、時代の哲学的・精神的潮流の中で何をどのように語ったのか、その絶妙なポイントを開示してくれる。

本書第三章は白眉であって、生老病死、喜怒哀楽に満ちた人間に降下し神御自身の生命に与る者として引き上げてくださる神の救済の御業の理解は、ギリシア教父に注目した本書ならではのもので、読者も得るところが大きいと思う。あとがきにあるように、著者が若い「友人たち」と呼ぶ大学院生とのリモート読書会での出会いなど、様々な人とのつながりから生まれた本書がこれから多くの読者をえることを、著者のあたたかい人柄を知るひとりとして心から願ってやまない。

(あべ・よしひこ＝立教大学教授)

(四六判・二三六頁・定価二六四〇円・教文館)



聴きく 議長室から

大柴 議治 著

日本福音ルーテル大阪教会牧師

●四六判並製 135頁

定価 1,100円

著者が日本福音ルーテル教会総会議長在任中(5年間)のJELC機関誌『るうてる』のコラム「聴 議長室から」を収録した。コロナ下による変則的な任期の中で「『神のみ言葉に聴く』という姿勢を貫くことができたことが、私自身を支えてきました(あとがきより)」。スピリチュアルケアの専門家による、「神の霊による魂のケア」の記録であり、コラージュセラピーとも呼びうるであろう。

ISBN978-4-86376-098-1

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

■新教出版社

旧約聖書 預言書

——要約と概説

宮平 望著

好評の「要約と概説」シリーズ最終巻（全四冊）。預言書すべての内容を章ごとに簡潔に要約し、ポイントを示す。聖書通読と学習の伴侶に最適。

A5判・312頁・予価2400円

クイア神学入門「仮題」

クリス・グリノフ著

薄井良子訳

「クイア」とは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー等々、ジェンダーやセクシュアリティの点で非規範的であることを表す語。キリスト教は、クイアであることとどう向き合うのか。多様な神学的冒険を解説した、日本語で読める初入門書。

四六判・300頁・予価2800円

■日本キリスト教団出版局

ヘンリ・ナウエン

——傷ついても愛を信じた人

酒井陽介著

20世紀最大の霊的指導者ナウエン。彼の思想と生涯を、ナ

を集めた記録。棄民の犠牲者でありつつ、侵略の加害者でもあった悲劇。

A5判・240頁・予価2800円

ヨブ記を読もう（仮）

並木浩一著

苦難の意味を問うヨブ記は多くの読者をひきつける。しかし、その難解なテクストを読み通すのは一苦労。本書の明快な解き明かしと共に、ヨブ記を読み通そう！

四六判・232頁（予定）・予価2860円

遠藤周作探究Ⅲ

——遠藤周作の文学とキリスト教（仮）

山根道公著

遠藤周作に影響を与えた人々や出来事に関する考察、他の作家との比較等を通して、遠藤文学やその作品への理解を深める。

A5判・320頁（予定）・予価4400円

文脈の中のアフォリズム

箴言10-12章の構成の研究（仮）

加藤久美子著

2句からなる1行詩によって構成されている箴言10-12章。

INFORMATION

近刊情報

INFORMATION

近刊情報

ウエンの研究の第一人者が解き明かす。ナウエンファンにも、これからナウエンを読む人にも、必読の一冊。

四六判・168頁・1980円

聖書のお話を子どもたちへ

小見のぞみ著

子どもたちに伝わる聖書のお話をするためのノウハウが詰まった書。キリスト教幼稚園や保育園、教会学校などで、子どもと触れ合う人に、ぜひ読んでほしい。

四六判・128頁・予価1400円

日本カトリック教会の音楽

——明治期から昭和初期まで・宣教師らの軌跡とともに

時津ハインツ、天津磨由美著

開国後日本宣教を再開したカトリック教会。日本語聖歌集、日本人による聖歌、グレゴリオ聖歌研究など、日本のカトリック音楽に関する論考20編と貴重な資料をまとめる。

A5判・400頁（予定）・予価6600円

証言・満州キリスト教開拓村

——国策移民迎合の果てに

石浜みかる著

戦前戦中、国策として進められた満州開拓移民にキリスト教界も参加して移民団を送り出した。敗戦と共に帰国できた者がいる一方、命を落とした者も多い。その貴重な証言

そこに展開される構文や語形等を緻密に吟味し、その構造や統一性を明らかにする。

A5判・352頁（予定）・予価5280円

■教文館

キリシタン1622

——殉教・列聖・布教聖省 400年目の省察

川村信三、清水有子編

キリシタン文化研究会監修

禁教期における殉教、宣教の動向、教皇庁の宣教方針、潜伏キリシタンの信仰生活、為政者の民衆統治と「神格化」の問題などを採り上げ、当時のキリシタンの実相に多方向から焦点をあてる論集。

四六判・336頁・定価3520円

※訂正とお詫び

本誌前号の「シリーズこの三冊」中に誤りがありました。紹介雑誌中の執筆者の一人・北丸雄二氏のお名前を、2頁3段6行目及び3頁2段1行目において「北村」としていますが、正しくは「北丸」です。訂正してお詫びいたします。

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

畫期的著作集刊行開始！

福音と世界

2024年1月号

特集 原子力と再生可能エネルギー

寄稿者 片岡輝美、近藤恵、牛山泉

津田敏秀、木村護郎クリストフ、福岡場

好評連載 八木重吉の聖書（今高義也）、私は告白する、私の神を（長尾優、地域から考える在日朝鮮人史と教会史（金耿晃、グレート小林と三人の女（飯田華子、神と「女性的なるもの」を辿って（後藤里菜）、古代イスラエル文学史序説（勝村弘也）ほか

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyo-pb.com

編集室から

『赤ちゃんをわが子として育てる方を求む』（小学館）は、わたしの愛読書です。1970年代、生まれてきても実親が育てられない赤ちゃんを妊娠できない夫婦にあっせんしていたとして問題になった「赤ちゃんあっせん事件」を起こした産婦人科医・菊田昇が主人公です。この行為は違法とされ、菊田は孤立無縁の状態に置かれることもありながら、命を守るため不屈の闘志を燃やし、後に特別養子縁組への道を開きます。

そんな菊田の生涯を幼少期から逝去までを描いた評伝小説です。わたしが特に印象に残っているのは、宮城県石巻での菊田の少年時代の過酷にして幸せでもあった日々です。人はどんなに逆境にあっても何か糧になるものが実は身近

予告

本のひろば

2024年2月号

本・批評と紹介

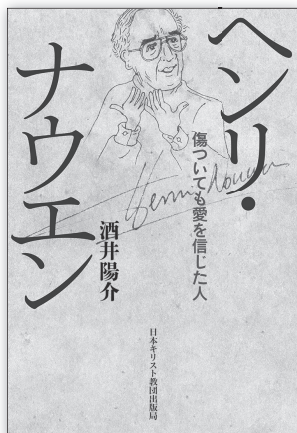
（巻頭エッセイ）小林よう子（書評）宮越俊光著『シンボルで味わう典札・礼拝』、西谷幸介著『日本教』の極点』、袴田康裕著『ウェストミンスター信仰告白講解 下巻』、大野高志著『わたらに、今、たたずんで』、大柴譲治著『聴 議長室から』、浅野淳博著『新約聖書の時代』他

にあることに気づけば、力を得て人生を切り開いていけるのだということに気付かされます。

著者の石井光太さんは気鋭のノンフィクションライターで、貧困問題や家族問題など現代社会の暗部に丁寧な取材で斬り込んだ作品で知られます。『赤ちゃんをわが子として育てる方を求む』では、菊田とキリスト教との関わり、信仰に導かれる過程が菊田の心情的な部分も含めて丹念に書かれており、それなのにまったく護教的ではありません。この本は伝道目的に書かれたものではないと思います。菊田の生き方がおのずと神を証していることに、わたしは読むたびに感動するのです。

そして、伝えたい気持ちしがちなことを反省しつつ、キリストの教えの普遍性をもっと信じて、のびやかに文書伝道に携わりたいと思います。（市川）

「傷ついた癒やし人」ナウエンの生涯と信仰を丁寧にたどる



ヘンリ・ナウエン

傷ついても愛を信じた人

酒井陽介

2023年12月15日刊行予定

20世紀を代表する霊的指導者ヘンリ・ナウエン。現代世界で傷だらけになって神を求め続けた、その生涯と信仰を、ナウエン研究の第一人者がわかりやすく描く。神の愛が見えにくく、魂の飢え渇く今こそ、ナウエンを！

◆四六判 並製・168頁・定価1,980円

ナウエン・セレクションシリーズ／好評発売中

＊『今日のパン、明日の糧 —暮らしにいのちを吹きこむ366のことば』 定価2,640円

『アダム —神の愛する子』 定価2,200円

『死を友として生きる —「最大の贈り物」&「鏡の向こう」』 定価2,420円

＊『傷ついた癒やし人 新版』 定価1,980円

『老い —人生の完成へ』 定価1,980円

＊印の本は
解説：酒井陽介
です

すべての命に平和を

剣を打ち直して鋤とする2

菊地 謙

2023年12月1日刊行

世界各地で戦争の相次ぐ現代。高齢化した元・日雇い労働者の「食」に携わる伝道者が、かつて明治維新から侵略戦争に突き進んだ近代日本の歴史を振り返りつつ、二度と惨禍を繰り返さないため「平和」の道を考える。

◆四六判・並製・230頁・定価2,860円



前著／好評発売中

『剣を打ち直して鋤とする —すべての命に然り』 定価2,200円

12月の新刊（価格表示は税込）

聖書事典の金字塔
待望の復刊！



聖書学だけでなく、古代言語学・歴史学・考古学・宗教学などの成果を結集し好評を博した大事典が、手に取りやすい縮刷版で登場！ 早期購入特典として、同時復刊の『新装復刻版』聖書地図を応募者全員にプレゼント（応募締切・2024年4月末）。

● A5判・上製・函入・1456頁・定価29,700円

『縮刷版』 旧約新約聖書大事典

旧約新約聖書大事典編集委員会 編



閉ざされた庭で少女が体験する
奇跡の物語

『小公子』『小公女』のバーネットの代表作を児童文学翻訳の名手が新訳。世紀を超えて愛される傑作の邦訳決定版！

● 四八判・上製・440頁・定価2,310円

秘密の花園

F・H・バーネット作
脇 明子訳



慰めを語り、生きる共同体としての教会を、
この地上にいかにか形造るのか？

「説教」「礼拝」「魂への配慮」「伝道」「教会形成」など、実践神学のさまざまな主題をめぐる講演と論文を収録。

● A5判・並製・336頁・定価4,290円

慰めとしての教会に生きる

加藤常昭 著

カナダ合同教会 日本での百年

カナダ・メソジストの歩み「明治・大正編」

グウェン・R・P・ノルマン 著

後藤哲夫 訳



1873（明治6）年に始まるカナダ・メソジストの日本宣教の記録。中部地方を中心とする各地に教会を設立し、教育活動（東洋英和、静岡英和、山梨英和、関西学院など）や社会事業のために奔走した揺籃期の活動を綴る貴重な通史。

● A5判・並製・500頁・定価4,950円

愛に祈る人

無教会キリスト教伝道者 實田愛子の生涯

矢田部千佳子 著



明治から昭和の激動の時代を生き、山本七平の岳母でもあった伝道者・實田愛子。その信仰と人生から、日本キリスト教女性史の一面を示した珠玉の評伝！

● 四六判・並製・120頁・定価1,100円

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3561-5549（出版部直通）《呈・図書目録》

キリスト教の書籍やCD、グッズのご注文は（e-shop 教文館）
<http://shop-kyobunkwan.com/> まで！



本のひろば.com



一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可
二〇二四年一月一日発行（毎月一回一日発行）
本誌三三三 第七九三号 二〇二四年一月号

発行所 〒163-0214 東京都新宿区新小川町九一 一般財団法人キリスト教文書センター
電話 〇三・三三六・五二〇 振替 〇一七〇・五一二・六七九
発行人 金子和人 編集人 村上信児 印刷所 モリモト印刷 印刷 〇三・三三六・〇一五・六七〇
発売所 日本キリスト教書販株式会社 電話 〇三・三三六・〇一五・六七〇

定価七八円（税抜七一円）（〒63円）
一年分二二〇〇円（送料共）